

江戸時代は世界の未来

江戸開府四〇〇年によせて

明治以後の江戸時代観

今年は江戸幕府が開かれ、政府に反逆した榎本武揚を、それから四〇〇年目に当たる委員長として開かれていそうで、東京の「江戸東京博物館」や名古屋の「徳川美術館」での「江戸開府四〇〇年記念特別展示」から、江戸の旧跡を巡るウォークラリーに至るまで、様々な行事が各地で行われている。東京都営の新しい地下鉄が「大江戸線」と名づけられても、都民に格別の違和感はない。それだけ、江戸時代の持つ意味が、広い範囲で注目され納得されてきたということだろう。

道ですすむ。もともと明治維新というのは国家の体制を地方分権から中央集権に変える一つの革命だった。成功した革命家が前の時代を否定するのとは当然である。政府は富国強兵を国是とし、アジアへ侵略し米英など連合軍と戦い、そして敗戦を迎えた。戦後は、民主主義が国是となる。しかし、中央集権という国家運営の手法は変わらなかった。地方自治体の首長は住民が選ぶことになつてはいるが、国家による統治は国のすみずみまで浸透している。

江戸時代の新しいイメージ

こうして明治以来の中央集権の国家運営の継続のなかで、江戸時代は「土農工商」の身分社会であり、「封建的」な社会であり、武士は切り棄てて、人民は生かすように殺さぬように真綿で首を絞められる、そういう暗黒の時代だったというイメージが広く流布されてきた。

は、一八九四(明治二十七年)日清戦争、一八九五(二十八年)台湾割譲、一九〇四(三十七年)日露戦争、一九一〇(四十二年)韓日併合、と、もっぱら対外拡張の

江戸時代は島原の乱(一六三七年)という局地的な内戦を除けば国内での武力行使はなく、また幕府成立直前の秀吉による朝鮮侵略(一五九二、九八年)以後は海外への出兵もなく、二世紀半も平和の時代が続いた。



米の収穫を祝う村びとたちの満ち足りたようす(『農業図絵』日本農書全集第26巻より)

前半の七〇年ほどは開発の時代で耕地も人口も二倍前後増加した。生活する場所が丘陵から平野へと拡がり、村々に小農家族という形で庶民が誕生した。そして元禄の繁栄時代(一六八八―一七〇三年)を迎える。

繁栄の時代を到来させた開発の時代を、現代の高度経済成長期になぞ(次頁へ)

農文協

江戸時代を読む①―増刊

現代農業より「

すべては江戸時代に花咲いた



暮らしが景色をつくる

ニッポン型景観形成の源流

アメニティ豊かな地域景観づくりの原点は、欧米型の「つくる」景観でなく、江戸期に各地で人々が自然を活用して暮らしを育てた営みの中にある。山―川―田畑―海―集落、街の美観を生んだ人と自然の関わりを掘起す。

【近刊】8月号(7月上旬刊)

百姓天下の江戸時代(仮)

江戸時代、首都・江戸よりも深く地方都市・農村のすみずみに浸透していた「自然―人間」の民主主義と農―工―商連携分権型社会の豊かさ。

●900円

ご注文は

農文協〒107-8668 東京都港区赤坂7-6-1

☎03(3585)1141

FAX03(3589)1387

URL=http://www.ruralnet.or.jp/

価格は税込

先進地畿内の綿栽培技術を全国に広げた大蔵永常著『綿圖要務』
(日本農書全集第15巻)



らえてみると、元禄以後幕末までの約一五〇年の間は低成長の時代である。しかし、江戸時代の場合は、この低成長期がまた、成熟と爛熟の時代でもあった。今という環境保全やリサイクルの知恵が、山野でも都市のすみずみでも発揮される。山林での留山、留木の制(乱伐の防止)、魚付林の確保(沿岸漁業の保護)、都市の尿尿の農地への還元などは、そのほんの一例である。

江戸時代を見直す仕事

一方、諸国の特性を生かした物産(特産物)の振興が行なわれる。地域資源の開発と新しい作目の導入が活発に進められた。朝鮮や中国からの輸入に頼っていた綿布は、綿作の広がりに

よって自給が可能となった。台湾産などに頼っていた砂糖も、サトウキビの栽培が讃岐や阿波をはじめ各地に広がり、十九世紀初頭にはほぼ国内生産を達成している。

近世史家大石慎三郎氏は「江戸時代の社会」というのは、日本の歴史の中で唯一の、下から積み上げていく社会なんです。幕府がその上に立つて全体の利害を調整する役割を果たしてき

た。それをつぶして明治政府ができると、今度は下をつぶして上から下を押さえ込んでいくシステムに作り変えて、今も基本的にはこのやり方が続いています。『現代農業増刊・ニッポン型環境保全の源流』三二ページ)

そうしたなかで農文協は、江戸時代を見直すための本を系統的に出版してきた。まず「日本農書全集」全七二巻・別巻一がある。これは江戸時代の「農書」と呼ばれる文書三百余点を集成し、原文と現代語訳を上下二段に組み、詳細な注釈と問題を

つけたもので、江戸時代農村からのメッセージをいまの言葉でだれでも手軽に読めるように編集されている。朝日新聞社の第三回明日への環境賞を受賞した。



大衆消費時代を担った民の力—革新的な店頭正札販売で呉服を庶民に広めた三井家

つぎに「江戸時代人づくり風土記」全五〇巻。これは現在の都道府県別の巻構成をとり、各地でみられた自治と助け合い、物産振興の実績、地域に根ざした教育、子育てと家庭運営、隠れた先駆者の業績などを物語風に記述した、いわば江戸人の暮らしのアンソロジーとなっている。

江戸時代の特異な思想家安藤昌益の、現在までに発見された全著作の影印版(複製版)と、その書き下し文、さらに現代語訳、解説を

本号は、以上四つの江戸期にかかわる全集を、江戸開府四〇〇年を記念して特集し、以下に各全集を詳しく紹介することとした。不況の時代をどのようにして成熟の時代に転化するか、あるいは物質的な豊かさからどのようにして真の豊かさを取りもどすかを熟考するための座右の書として活用していただきたい。

江戸時代にみる日本型環境保全の源流



システムとしての森・川・海

長崎福三著 漁民による植林が話題の江戸期からの魚付林の知恵を現代に活かし、流域住民による新たな資源・環境管理を大胆に提言。

自然を守るとはどういうことか

守山弘著 一切の人為を排することが保護なのか―農耕の人為が豊かにした里山の生態系から「自然」「保護」の意味を再考。

新石油文明論

槌田敦著 細切れの俗流環境対策を排し、開放系エントロピー理論で、江戸期の環境回復をモデルに自然を育む石油文明への転換を展望。